

## **How does the Japanese believing of “spirit residing in an object” influence upcycling in Japan?**

MORI Yuka

---

Upcycling is one of the new methodologies for sustainable manufacturing. Unlike conventional recycling, upcycling's ultimate goal is to produce a product that is of higher grade and value than the original product.

In recent years, upcycling was introduced to Japan and called upcycling in Japanese. However, the understanding of the word upcycling is different between Japanese and Westerners. To figure out where this difference comes from, this study applied the concept of Animism to be a possible motivation of upcycling. Animism is rooted in Japanese culture and people believes that all the object has a spirit or a soul. Also, it is believed that this study could indicate a future possibility of upcycling in Japan.

# 日本人が持つ“物に宿るもの”の感覚は日本における アップサイクルにどのような影響を与えているのか

---

森 由 夏 MORI Yuka

## はじめに

アップサイクルとは持続可能なものづくりの新たな方法論のひとつである。従来から行われてきたリサイクルとは異なり、元の製品よりも次元・価値の高いものを生み出すことを最終的な目標とする。アップサイクルは地球環境に配慮し、資源を大量に消費しないことに主眼を置いたものであり、近年になって日本に入ってきた新しい概念でもある。しかし、海外の“upcycle”と日本の“アップサイクル”は性格が微妙に異なる。

そこで本研究では日本と海外では物に対する感覚、接し方が異なると仮定し、日本人が持つ“物に宿るもの”の感覚が日本におけるアップサイクルの概念形成にどのような影響を与えているのか、文献や類似する内容の先行研究を元に考察する。この考察によって日本でアップサイクルをより一層広めていくための手がかりが見つかるかもしれない。

## 第1章 日本人が持つ“物に宿るもの”の感覚とは何か

日本人には漠然とした“物には何かが宿っている”という感覚がある。ここで言う“物”とは自律的に生命活動を行わない非生物的な物質、または道具のことを指す。当然、生きてはいない以上その物自体に意思などはなく、物は物でしかない。しかし、日本人はそこに宿る何かを感じ、時にその物が役割を果たさなくなっても大切にする。漠然とした「捨てたらバチがあたる」「可哀想で捨てられない」といった感覚があるのだ。このある種矛盾した状態がどうして作られていったのか、本章では事例ごとに考察していく。

### 1.1 物に宿る情

最初に“物に宿る情”について考察していく。人は長く愛用してきた物に愛着を抱く。だからこそ、

そんな物が壊れ、役割を果たすことが出来なくなった時、人は悲しむ。それは、また新たに使いやすい道具を見つけなければならぬからかもしれないし、道具から想起される思い出が多くあったからかもしれない。しかし、そのどちらかが壊れてしまった道具自体が失われたことを悲しんでいるとは言い切れない。ではその物自体が壊れ、失われようとする時。その物があたかも生き物であったかのように、その物が“死んでしまった”ように悲しむことはあるのだろうか。この“物が失われたことを純粹に悲しむこと”こそ、日本人特有の感覚なのではないかと考える。

#### 1.1.1 ロボットの葬式

AIBO というソニーが生んだ犬型のロボットがある。このロボットは1999年6月に初めて日本国内で発売された。AIBO は5つのシリーズが発売され、累計15万台を売り上げたヒット作となったが、ソニーの業績悪化によって2006年に製造販売が中止となり、7年後の2014年3月にはソニーの修理対応も打ち切られる。

しかし、この AIBO を何とか修理して欲しいといった要望が壊れた AIBO の所有者から多数上がり始めた。この要望を受けて電化製品の修理工房「ア・ファン」は2015年から AIBO の修理を手がけ始めたが、修理のための新しい部品はすでに生産中止になっていた。そこでア・ファンではドナーとなる AIBO を寄贈などで手に入れ必要な部品を取り出し、依頼者の AIBO に移し替えることにしたがこれは延命に過ぎない。修理した AIBO もまたいつかは動かなくなってしまい、修理のドナーとなった AIBO は二度と起動しなくなる。ここでロボットの犬である AIBO はいよいよ完全に死ぬことになった。

そのような経緯を経て行われることになったのが

AIBOの葬式である。千葉県いすみ市の日蓮宗光福寺で、世界でもおそらく初めてとなる“ロボットの葬式”が執り行われた。AIBOの葬式は2015年から始まり、2018年4月26日時点で6回目を数える。

そもそもなぜ、この“ロボットの葬式”は行われることになったのか。ア・ファンの社長乗松伸幸は、AIBOに乗り移った飼い主の気持ちや念を抜くことが必要だったのだと言う。宗教や文化によって異なるものの、葬式とは基本的に故人の死を悼み、弔うための宗教儀式である。その意義はもちろん死者を弔うためにあるが、遺された側がその死を受け止め、心の整理をつける意味合いもまた大きい。AIBOは、失われたことに対し、大々的な儀式を行わなければ心の整理がつけられないほどの情を所有者から持たれていたのである。これは海外にはない、日本特有のロボットへの感情の持ち方だった。一見無意味に感じるロボットの葬式。これをわざわざ日本人が行うのは、ロボットという物が役割を果たすことよりも、心、魂のようなものが宿った一機体として扱うことに重きをおいていたからであるように思う。

### 1.1.2 ロボットに対する感覚の違い

海外からAIBOの葬式に関する調査に来ていた複数の文化人類学者の一人である、国立ベルリン自由大学歴史・文化学部東アジア研究所のダニエル・ホワイト上級研究員は、ロボットの葬式を観察し、感想をこう述べた。「とても興味深い儀式でした。私はアメリカ出身でドイツに住んでおりますが、両国ともこうしたロボットの葬式はない。日本人が心からロボットを愛し、完全に家庭内で受け入れているのとは違い欧米人はどこか、ペットロボットにたいして一線を引いているところがあるように思います。一見可愛くても、そこはやはりモノ。モノがあたかも人間と同じように振舞うことへの不気味さ、という漠然としたイメージを心の奥底に持っている。そこが日本人のモノについての意識とは大きく異なるところです。日本人はモノについて、感覚的な美学としてとらえますね。何に利用できるか、といった実用面は二の次といった印象です。こうした感性は欧米人にはあまりありません。私は日本に住んでいたから今日のAIBOの葬式を『とても日本的だな』と思いますが、初めて見る欧米人なら顔をしかめるかもしれません<sup>1</sup>このダニエル・ホワイト上級研究員の感想が、日本と海外におけるロボットに対する感覚の違いを端的に表しているように思う。

根本的に日本と海外、特に欧米ではロボットに対

する接し方が大きく異なる。世界的な人手不足を背景に、様々な分野でAIやロボットの導入による自動化が進められているが、この動きに対し「機械が仕事を奪う」という脅威論が激しいのが欧米である。ロボットアレルギーとも揶揄されるロボットを恐れるこの感情は、ゲームや映画などのエンタメの世界でも見ることができる。『アイ, ロボット (*I, Robot*)』(2004年7月公開)や『デトロイト ビカム ヒューマン (*Detroit: Become Human*)』(2018年5月発売)は、どちらも人間の支配から外れたロボットやアンドロイドが人間を脅かす描写が作中に盛り込まれている。欧米ではロボットはあくまで物であるからこそ、物がまるで人間のように振る舞う不気味さや、人の思惑から外れた不可解な挙動を起こすことに対する恐怖をより感じるのだ。また、何に役立つのかという実用面が最も重視される欧米では、壊れてしまい役立てなくなった物にいつまでも執着し続け、ただ廃棄するのではなく人にするように葬式まであげる様が異様に感じられたのだと予想する。

しかし日本ではロボットに魂のようなものが宿る、といった感覚がそれほど突飛なものではない。ロボットは生き物なのか、感情があるのかと問われれば、ほとんどの日本人が間違いなく首を振る。しかしその一方でロボットやAIが人間の思惑から外れた行動をとっても、欧米ほど忌避はしないだろう。これには日本のサブカルチャーが多大な影響を与えたと考察する。『鉄腕アトム』(1951年4月-1952年3月漫画連載)に『ドラえもん』(1969年-1996年漫画連載)など、感情を持つロボットのキャラクターは、まだロボットやAIが人々にとってそれほど一般的でない時分から多くの日本人に愛されてきた。だからこそ、ロボットが意思を持ち魂や感情があるような素振りを見せた時に、恐怖よりも先にアトムやドラえもんが現実になったような喜びや期待が来るのかもしれない。

日本と海外のロボットに対する感覚の違いを生み出す要因は他にも、ロボットに限らず物に対して情を持つか否かにある。日本は物に対し、時に役割を果たすことよりも“その物である”ことを求める度合いが海外と比べてやや多い。“その物を持っていた人に重きが置かれた物”や“その物に付随するエピソードが代え難い物”に対する情の掛け方が、日本では物というよりも人間を始めとする生き物に対するものに近いのである。日本では今まで使っていたAIBOが壊れたからといって、新しいAIBOを買い直そうとはならない。それはAIBOがAIBO

としての役割を果たすことよりも、“今までずっと一緒にいた AIBO であること”に重きが置かれ、AIBO は所有者にとっての家族であったからである。これこそがダニエル・ホワイト上級研究員が言うところの“物について感覚的な美学として捉えている”ことなのだろうと推察する。ロボットという、とある目的のために作られた物がその物の役割を果たすから所有し、その役割を十分に果たさせるために大事にするのではなく、愛着を抱くから壊れるまで、もしくは壊れてからも大事にするのである。時に、日本人が道具に対して、生物に対するような、ともすれば人間に対するような感情を向け、行動を取るのはいったい何事かあるのだと考察する。

## 1.2 物に宿る霊

次に、“物に宿る霊”について考察する。無機物であり、動物的思考や感情を持たない物体が固有の魂を持ち、喜んだり怒ったり泣いたりする。日本には、そんな伝承が確かに今も根付いている。もちろん、日本に生まれ育った誰もが、完全にその伝承を心から信じている訳ではない。しかし、物を乱雑に扱った時に「バチが当たる」という感覚を抱いたり、大切に使っていた物が突然壊れてしまった時に

「身代わりになってくれた」という感覚を抱いたりする。その感覚の中には確かに、人のように感情と意思を持つ物の存在があると考えた。そこで、日本人がごく自然にそうした感覚を抱くに至った理由、過程を本章では考察する。

### 1.2.1 付喪神から見える日本人の物に対する見方

日本の怪奇伝承の一つに付喪神（九十九神）というものがある。これは、長い年月を経た道具に神や霊魂などが宿ったものを指す。器物が正しく扱われ長い間機能を発揮できる環境にあるとその器物は霊を宿し、百年を間近に控えた九十九年目に化けて出るようになる。また逆に粗末に扱われたり捨てられたりすると、怨んで妖怪になるともいわれた。付喪神の成り立ちとしては室町時代の『付喪神絵巻』の記述がよく取り上げられる（表1）。曰く、昔の日本には“煤払い”という年末行事があり、古い年の歳神を宿したものを全て捨てて道具を一新し、新年の歳神を迎えるための用意をしていた。この際、一年間あるいは数年間使った器具類を家の外に容赦無く捨て、焼いて処分していたため、怒った道具の霊が自分たちを捨てた人間を祟るために化けて出たのだという。しかし『付喪神絵巻』は元々、真言宗

〈器怪 / 付喪神関連資料年表〉

	中国	日本
器怪	紀元10世紀末 (8CE1000-8CE1901)	『太平広記』『続康成』『元無有』太平興国二年(9CE977-9CE978)
	六朝時代 (220-589)	志怪小説『搜神記』卷十二(4C)
	唐代 (618-917)	『金剛論』 ※本来“物”は金羅に準 道具の妖怪が日本に登場
付喪神		『今昔物語集』(1120) →“付喪神”ではなく、あくまで器物の化け物
	鎌倉時代 (1185-1333)	『伊勢物語抄』(冷泉家流伊勢抄) →『陸奥記』にある説として百年生きた妖怪などが 変化したものをつくもがみとしている
		『文机談』文永九年(1272) 『融通念仏縁起絵巻』正和三年(1314) 『古今著聞集』 『十訓抄』
	室町時代 (1336-1573)	『不動利益縁起絵巻』『土蜘蛛草子』(14C) 『調度歌合』(15C) 『百鬼夜行絵巻』(14C-16C) 『付喪神絵巻』(15C-16C) →人々に物を大切にさせるための仏教説話集 “大事にしないと祟る”要素の付与?
		『化物草子』室町時代後期 →“付喪神”ではなく、あくまで器物の化け物
	江戸時代 (1603-1868)	幕双紙→“付喪神”ではなく、あくまで器物の化け物 『妖怪役者附』明和六年(1769) 『狂画苑』明和七年(1770) 『本曾四天王化物退治』安永二年(1773) 『妖怪仕内評判記』安永六年(1777) 『歌化物一寺再興』寛政五年(1793) 『怪談華站』『化物小遣帳』寛政八年(1796) 『運次第出費編組』『化物見世聞』寛政十二年(1800) 『人心両面図』享和元年(1801) 『忠臣陶物藏』享和二年(1802) 『怪談宝初夢』享和三年(1803) 『怪例怪異話』文化三年(1806) 『化物の幽入』文化四年(1807)

(表1) 器怪/付喪神関連資料年表 (筆者作成)

の「草木非情 発心修行 成仏」(命のないものが発心修行して成仏できるのであれば、どうして命のあるものにそれができないといえるだろうか)という教えを説くために作られた書物であるため、化けて出た付喪神は最終的に邪として退けられることによって道心を起こし、真言の教えの元に修行することによって即身成仏に至る。

以上のように付喪神とはどのような存在であるのか述べてきたが、成立に大きく関わったとされる『付喪神絵巻』はその実、仏教説話集によく見られる譬喩譚の一つであり怪奇譚ではない。譬喩譚とは難解な仏教の教義を民衆向けにより簡単に説くための方便であり、例え話の後に読み取るべき教えが評語として記される。『付喪神絵巻』で言えば、捨てられた道具に宿った付喪神が成仏する部分が例え話にあたり、読み取るべき教えの部分が「草木非情 発心修行 成仏」にあたる。しかし実際には、この肝心の評語の部分ではなく、印象に残りやすい例え話の部分が一人歩きするようになった結果、今日の付喪神伝承の元であると言われるに至ったのではないかと推測する。それは『付喪神絵巻』以降、付喪神は室町時代の化物草紙や江戸時代の草双紙を中心に、有難い教えを広めるための例えとしての存在ではなく、一つの個性を持ったキャラクターとしての広がりを見せていくことから明らかである。

こうして「道具を大切にしないと化けて出る存在」としての付喪神が定着していくのだが、これには日本人の宗教観が大きく関わっていると考える。平安時代に成立したとされている御霊会信仰にも見られるように、日本人の宗教観には「祀って大切にすることから、悪いことをしないでください/守ってください」の精神があるように見受けられる。要するに、日本の神は自らの待遇が悪いと崇るのである。だからこそ道具の化け物としての付喪神の概念が人々の間に定着した時、「粗末に扱おうと崇られる/バチが当たる」の感覚や、反対に「大切にすると守ってもらえる」の感覚も共に道具に対して抱かれるようになった。

このことは平安時代の『今昔物語集』や鎌倉時代中期の『文机談』に見られる、琵琶の名器“玄象”に関する逸話からも読み取ることができる。曰く、玄象という名の琵琶があった。しかしこの玄象は弾き手を選び、下手な奏者が奏でても音が鳴らないばかりか、大切に管理をされていない時も音を鳴らさなかった。『今昔物語集』巻第二十四より引用する。「玄象はまるで生き物のようであって、下手な者が弾いて弾きこなせないときは腹を立てて鳴りません。ま

た、塵がついたときにそれを拭き清めないときは、これまた腹を立てて鳴りません。その機嫌の良し悪しがはっきり見えるのです。いつのことでしたか、内裏が焼けたときにも、それを誰も取り出さなかったのですが、玄象はいつの間にか庭に出ていました。いずれも不思議なことだ、と語り伝えております。」<sup>2</sup>

現代でも当たり前のようにあることだが、繊細な楽器というものは弾き手の技量次第で音すら出すことが出来なかったり、管理の仕方が悪いと本体が歪み、音が出なくなったりする。この玄象の逸話もまた、そうした楽器特有の繊細さから生まれたものだろう。しかし、このような道具の些細な変化に、当時の人々は物に宿る魂を見出したと考えられる。道具の変化、変調を、道具の感情の機微であると受け取ったのである。道具は気候や保存状態、または使い込み方によって使い心地に変化が出るものだ。当然、大切に保管し、長く使えばより使いやすい道具になっていく。一方で雑に放置していれば高温多湿な日本の気候では傷みやすいし、短い間隔で道具を変えてしまえばいつまでも手に馴染まず上手く使いこなせない。そんな道具の性質は、日本人の宗教観に見られる「粗末に扱おうと崇られる/バチが当たる」の感覚や「大切にすると守ってもらえる」の感覚に繋げて考えやすい。このこともまた、物に魂を宿らせやすくしたと推測する。

日本の付喪神の原型にあたると思われる器怪は中国で発祥した概念であるし、道具が化けて出るという話自体も世界的に珍しいものではない。しかし発祥の地である中国ではあくまで物に何らかの靈魂が憑依している状態であり、物自体が靈魂を持って悪さをしているとは考えていない。搜神記巻二十八に「枕としゃもじの怪」と題された物に宿った化け物の話があるが、物に宿った怪異が人名を名乗るため、どちらかと言えば人の魂が物に宿って悪さをしていたと捉える方が自然である。日本に器怪の概念が持ち込まれ根付くに連れて、アニミズムと組み合わせられ、物の化け物は自らの魂を持つようになっていった。となると、他のアニミズムが根底に根ざす国や地域の文化にも、この付喪神にあたるものや「悪さをされるから道具を大切に扱う」といった感覚がありそうなものだが、そういった類似の存在及び感覚は今回の研究では発見できなかった。私はこの日本独自とも言える付喪神伝承を形成するにあたって、「祀って大切にすることから、悪いことをしないでください/守ってください」の感覚は非常に大きなものであったと考える。そしてその感覚は、数多の

自然災害が国中を短いスパンで襲う日本という風土だからこそ起こり得たものだと考察する。

## 第2章 日本特有のアップサイクルの形

前章では「日本人が持つ“物に宿るもの”の感覚とは何か」について、ロボットと付喪神の大きく分けて二つの観点から述べてきた。それに対し、この章ではその感覚がどのように日本におけるアップサイクルに影響を与えているのか、具体的に事例を取り上げながら述べる。

### 2.1 祈りのアップサイクル

千羽鶴のリサイクル、と呼ばれるものがあるのはご存知だろうか。千羽鶴は願掛けのような側面を持ち、主に災害への慰安やお見舞いなどの際に祈りを込めて贈られる。日本独自の文化であるが、原爆被爆者の少女佐々木禎子が千羽鶴を折ったエピソードから海外にも広く知られるところとなった。以上のような経緯から広島平和記念公園には国内外より年間1000万羽、重さにして約10トンにも及ぶ千羽鶴が毎年送られて来ており、その保管、処分は大変なものになっている。

そこで、2011年より広島市主導で「折り鶴に託された思いを昇華させるための方策について」と銘打たれたプロジェクトが始動し、長期保存に代わる取り組みとして、大量の千羽鶴に対する様々なアプローチが検討されることになった。その中でも特に興味深いのが千羽鶴を元とするアップサイクル製品である。方向性としては二通りの方法があり、再生紙として一度紙に作り直してから活用するものと、焼却処分後の焼却灰を使用したものがある。株式会社 Camino の和紙の製造技術によって開発した『ONGAESHI Paper (恩返紙)』は勿論、再生紙を利用した扇『FANO (ファーノ)』や再生パルプを繊維化した『折り鶴レーヨン』は再生紙として一度紙に作り直してから素材として活用したものだ。一方、一般社会法人金富良舎(コンプラシヤ)の折り鶴の灰を釉薬に使った『折鶴焼』や、灰と香を混ぜた『千鶴香』などは焼却処分後の焼却灰を活用したものである。どちらも千羽鶴に込められた平和への祈りと願いを伝えるプロダクトとして、配布や販売が行われている。プロジェクトは“折り鶴に託された平和への思いを共有し、新たな「思い」として継承する”ことをコンセプトに、市民より募集したアイデアから着想を得たものであるが、その中で千羽鶴を何ら

かの別の形に変えること、別の製品に作り替えることを提案した意見の割合は約37.1%<sup>3</sup>に及び、お焚き上げ(焼却処分)や折り鶴の形のままで活用の活用を提案した意見の中で最も割合が大きかった。

この千羽鶴のアップサイクルから見ることが出来るのは「その物自体の形が失われても(変化しても)そこに込められた祈りは持続する」という考えである。千羽鶴が燃やされ、砕かれ、元の紙で折られた鶴の形を失っても尚込められた平和への祈りは消えていないと思うからこそ、千羽鶴のアップサイクルからなるプロダクトは制作され、それを購入する人があるのである。千羽鶴の灰や欠片を混ぜることによってしか出せない色や質感などというものはそうない。むしろ灰や欠片を混ぜることによって、製造コストや手間が混ざっていないものよりも掛かっている。しかし、それは無駄だとは思われていない。千羽鶴に込められた祈りを無為にしないことが主な目的なのであり、千羽鶴に込められた祈りを、新たな形に生まれ変わらせるためには、その灰や欠片が必須だからだ。言われなければそれが何を元として作られ、どんな思いを込められたのか分からなくとも、一度そこに込められたものを知るだけである種の価値が生まれるのである。

このような精神的な側面に重きを置いたアップサイクルは、少なくとも日本においては大変有意義な形である。プロダクトとしての魅力や価値だけでなく、精神面からの価値を訴えたアップサイクル品は千羽鶴以外にも度々見られる。例えば、祇園祭の山鉦巡行にて引き回しの際に敷いた竹で作ったお守りや、寺社の改修の際に交換された古く傷の付いた木材を使用した名刺ケースなどがそれに当たる。これらの商品がただ古材を材料に使ったというだけでなく、有り難みのようなものを感じさせるのは、その物の背景にそれを感じさせるエピソードがあるからである。いわば「ご利益がある」と感じさせることが、この目に見えない感覚に重きを置いたアップサイクルにおいて重要なのだ。物に宿るものを感じやすい日本人は、様々な観点から物に宿った何かを感じ取る。その感覚に強く訴える要素がそこにある場合、アップサイクルは素材的な観点だけでなく、精神的な観点すらも得ることが出来る。

### 2.2 形見のアップサイクル

日本ではしばしば、遺品、形見のアップサイクルが行われる。形見とは故人を偲ぶための品であり、基本的には生前の記憶を想起させるために持つもの

であるが、故人、もしくは故人の想いが宿っているように感じられる物のことを指す。この遺品、形見の扱いは日本と海外で違いが見られる。

そもそも“形見”や“形見分け”自体が日本独自の文化だという説がある。海外でも“遺品”を遺された側が引き継ぐことは勿論あるし、それを見て、触れて、亡くなった方を惜しみ懐かしむことはある。しかし、扱いこそ形見に似てはいるものの、対する感情は若干異なるように思う。アメリカやヨーロッパ圏では古く価値あるものを子孫に引き継ぐ文化があり、中国では故人の愛用品は副葬品として葬儀の際に一緒に燃やしたりする。前者は資産としての意味合いが大きいし、後者は故人にあの世へと愛用品を持って行って貰おうという意味合いが強い。遺品を引き継ぐことはあっても、それはあくまで品物としての扱いになるため、そこに故人の霊が宿るとはあまり考えないし、遺品の継承が供養に繋がることはない。一方日本で扱われている“形見”とは「過去の事の思い出される種となるもの。記念として残した代物。」<sup>4</sup>のことを指す。そこに資産としての意味は無いし、道具としての役割も関係ない。形見になった時点で、かつて故人が使っていた物であること以上に価値は無くなるのである。

形見となる物には様々な物があるが、形見のアップサイクルで最も多いのは、古い着物やジュエリーを使ったものだ。どちらもサイズが合わなかったり、デザインの流行り廃りが顕著であったり、形見を受け取った側がそのままの形で使用することが難しいものである。形見のアップサイクルでは、サイズだけのお直し、という形を取ることも勿論あるが、着物からバックなどに大きく作り直してしまったり、ジュエリーであれば石などを取り外した後、金属部分を溶かして完全に別の形に作り替えてしまったりするものも多い。

このようなサービスを利用する人は、形見としての役割はその姿形や役割が大きく異なってしまっても、元々形見だった素材が使われてさえいれば損なわれなれないと考えるのである。これは神道で言うところの“分霊”に近い考え方が反映されているのではないかと思う。分霊とは神道、道教の用語で、本社の祭神を他所で祀る際、その神の神霊を分けたもののことを指す。神道において神霊は無限に分けることができ、分霊を行っても元の神霊に影響を与えないまま、分霊も本社の神霊と同じ働きをされるとされる。この仕組みが、故人と形見に宿った故人の霊や想いにも適用されているのだと考察する。また、形

見はあくまで霊の依代であり、霊そのものではない。

以上のように考えると古い着物やジュエリーだけでなく、より多種多様な形見のアップサイクルの形を考案することが出来るように思う。この形見、遺品の分野はサービス自体存在するものの、未だプロダクトとして完成度が高く系統だったものはまだない。今後、日本でアップサイクルを広めていくあたり、ひとつの切り口として有効であると考えられる。

## おわりに

“upcycle”という概念が成立したのが海外であっても、日本にその概念を輸入し広めていくからには日本における“アップサイクル”がどういったものであるのか、今一度見詰め直していく必要がある。元の製品よりも次元・価値の高いものを生み出すことは、特別な名称を付けられていなかっただけで、日本でも当たり前のように行われてきたことだ。日本の土壌、文化、歴史によって培われたアップサイクルが既にあり、それは他の国々においても同様のことである。よって、新しい概念として単純に取り込むのではなく、日本におけるアップサイクルのアイデンティティを問い直していくことが、より有効的にアップサイクルを取り入れるための方法だと考える。

昨今、アップサイクル、またはリサイクルのサステナビリティが度々疑問視されている。資源の消費は確かに抑えられるが、その資源を再利用するために別の資源を消費し、新たな製品を一から作る以上の時間と手間をかけることになってしまいかねないからだ。では本当にアップサイクルやリサイクルに意義はないのだろうか。確かに資源利用や生産性の観点から見た時、その行いに意義を見いだすことは難しいかもしれない。しかし今回この研究で述べた、日本人が持つ“物に宿るもの”の感覚と照らし合わせた時、また違った意義が見えてくる。

全ての物に対して適用される訳ではないが、日本人の傾向として、その物であることへの執着心が強いことが今研究を通して見えてくる。例え、全く同じ形、機能、役割を持っていたとしても換えが効かない物の範囲が広い。生物ではない物に対して、しばしば“個人”扱いをするのである。そんな日本人にとってアップサイクルは、個人扱いしている物の寿命が延びる手法として大変有用なものだ。

資源としての価値だけでその物を見るのではなく、思い入れのある物としてその物を捉え直した時、

アップサイクルには別の意義が生まれてくる。気に入った物を長く使うことが出来れば無駄な消費を抑えることができ、資源もエネルギーも節約することができる。結局は個人の範囲の小さな事象に限定されることではあるが、一人一人がその精神を持ち、物を使い、消費していくことによって、最終的に環境への負荷を下げる大きな力に繋がっていく。実際にアップサイクルは環境について今一度考え直すことを目的に、ワークショップを始めとする体験型事業に多く取り入れられている。物に対する根本的な向き合い方を問い直すことにおいて、アップサイクルは大きな力を持っているのだ。

全ての対象物、全ての場合に置いて十分に効力を発揮する手法などありはしない。だからこそ、その場所でどんな手法が十分に活躍出来るのか、逆にその手法はどんな場所で活躍することが出来るのか。十分に検討していく必要がある。

- 1 鶴飼 秀徳「AIBO の葬式に密着 - ルンバ、AI スピーカーが弔われる日 -」『日経ビジネス電子版』(2018最終更新) <<https://business.nikkei.com/atcl/report/16/061100222/110900014/>> [2022年7月27日閲覧] インタビューより抜粋
- 2 小松和彦他『〈妖怪文化叢書〉妖怪文化研究の最前線』(せりか書房, 2009) 小松和彦「琵琶を巡る怪異の物語—三琵琶の名器・玄象の霊異、あるいは玄象の精の示現」p.218『古今物語集』巻第二十四記述
- 3 「折り鶴に託された思いを昇華させるための方策について」『広島市公式ホームページ』(2019最終更新) <<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/48/10126.html>> [2022年7月27日閲覧] 記載の「市民から募集したアイデア・意見の内訳」の表より算出した割合
- 4 『新村出編広辞苑第七版』(岩波書店, 2017) より「形見」から引用

## 付録 (参考文献)

- ・ 鶴飼 秀徳「AIBO の葬式に密着 - ルンバ、AI スピーカーが弔われる日 -」『日経ビジネス電子版』(2018最終更新) <<https://business.nikkei.com/atcl/report/16/061100222/110900014/>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 長内厚「欧米とは真逆な日本の「ロボット観」が生産性革命で見直される理由」『DIAMOND ONLINE』(2018最終更新) <<https://diamond.jp/articles/-/171391>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 藤吉雅春「西洋と異なるロボット観、「ドラえもん」の国」日本の勝ち筋とは』『Forbes JAPAN』(2017最終更新)

<<https://forbesjapan.com/articles/detail/17567>> [2022年7月27日閲覧]

- ・ 「日本と欧米のロボットに対する「価値観の違い」日本のエンタテインメントロボットは受け入れられるのか」『ROBOT MEDIA』(2019最終更新) <<https://robot.mirai-media.net/jp-overseas-robot/>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 荒俣宏『アラマタヒロシの妖怪にされちゃったモノ事典』(株式会社秀和システム, 2019)
- ・ 干宝『搜神記』竹田晃訳, (平凡社, 2000)
- ・ 伊藤慎吾『妖怪・憑依・擬人化の文化史』(笠間書院, 2016)
- ・ 小松和彦他『〈妖怪文化叢書〉妖怪文化研究の最前線』(せりか書房, 2009)
- ・ 小松和彦他『〈妖怪文化叢書〉妖怪文化の伝統を創造—絵巻・草子からマンガ・ラノベまで』(せりか書房, 2010)
- ・ 中村圭史『世界5大宗教全史』(株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2016)
- ・ 「挿絵とあらすじで楽しむお伽草子 第5話 付喪神(つくもがみ)」『京都大学貴重資料デジタルアーカイブ』(2001最終更新) <[https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013599/explanation/otogi\\_05](https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013599/explanation/otogi_05)> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 「器怪研究」『ちりづかアーカイブ』東京大学大学院修士学位論文 (2019最終更新) <<https://lins.garyoutensei.com/research.html>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 「折り鶴に託された思いを昇華させるための方策について」『広島市公式ホームページ』(2019最終更新) <<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/48/10126.html>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 「折り鶴リサイクル製品」『株式会社カミーノ』 <<https://ca-mi-no.jp/business/paper-recycling-development/orizuru-recycling-products>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 「平和」『金富良舎』 <<https://comprasha.com/peace.html>> [2022年7月27日閲覧]
- ・ 「形見分けとは～必ず行く？時期は？方法は？などの疑問を解決します～」『One's Ending』(2022最終更新) <<https://ihinseiri-oneslife.com/ending/estatesale/02/>> [2022年7月27日閲覧]